

Berezin transforms related to multiplicity-free actions (1) : 一般論

野村 隆昭

京大・理

コンパクト Lie 群 K が有限次元複素ベクトル空間 V に重複度フリーに作用しているとする. すなわち, K は V 上の正則 (holomorphic) 多項式関数のなす空間 $\mathcal{P}(V)$ にも $\pi(k)p(z) := p(k^{-1}z)$ で作用するが, この $\mathcal{P}(V)$ が互いに同値でない K の既約表現に重複度 1 で分解されていると仮定する :

$$\mathcal{P}(V) = \sum_{\alpha \in A} \mathcal{P}_\alpha(V) \quad (\alpha \neq \alpha' \implies \mathcal{P}_\alpha(V) \not\cong \mathcal{P}_{\alpha'}(V)).$$

V に K -不変なエルミート内積 $(\cdot | \cdot)$ を入れ, 測度

$$d\mu(z) := \frac{1}{\pi^n} e^{-\|z\|^2} dm(z) \quad (n := \dim V)$$

を考えると, $\mathcal{P}_\alpha(V)$ は $L^2(V, d\mu)$ の閉部分空間で再生核 κ_α を持つ. $\mathcal{P}_\alpha(V)$ が K のユニタリ表現を実現していることから

$$\kappa_\alpha(kz, kw) = \kappa_\alpha(z, w) \quad (\forall k \in K, z, w \in V)$$

が成り立っている. さらに $H \subset GL(V)$ を K の複素化とすると, 対 (H, V) は概均質ベクトル空間になり, $\kappa_\alpha(z, z)$ が H の稠密開軌道上で決して 0 にならないことに注意しておく.

各 $\alpha \in A$ に対して, $\mathcal{P}_\alpha(V)$ に付随する Berezin 変換 B_α とは, 次で表示される $L^2(V)$ 上の積分作用素のことである :

$$B_\alpha f(z) = \int_V b_\alpha(z, w) f(w) dm(w) \quad (f \in L^2(V)),$$

$$\text{ただし} \quad b_\alpha(z, w) := \frac{1}{\pi^n} e^{-\|z\|^2/2} e^{-\|w\|^2/2} \frac{|\kappa_\alpha(z, w)|^2}{\kappa_\alpha(z, z)^{1/2} \kappa_\alpha(w, w)^{1/2}}.$$

特に Berezin 変換 B_α は正の自己共役作用素である. さらに, B_α は K の作用と可換である. すなわち $\pi_2(k)f(z) := f(k^{-1}z)$ ($f \in L^2(V)$) とおくと, $B_\alpha \pi_2(k) = \pi_2(k) B_\alpha$ ($\forall k \in K$) が成り立つ.

K -不変な $L^2(V)$ の函数の全体を $L^2(V)^K$ と記す :

$$L^2(V)^K := \{f \in L^2(V) ; \pi_2(k)f = f \quad (\forall k \in K)\}.$$

B_α は $L^2(V)^K$ を不変にする. そこでの作用は次の通り.

定理 1. $B_\alpha|_{L^2(V)^K}$ は $\phi_\alpha(z) := \kappa_\alpha(z, z)^{1/2}e^{-\|z\|^2/2}$ で張られる 1 次元部分空間 $\mathbb{C}\phi_\alpha$ への直交射影作用素である.

Berezin 変換 B_α は, K の 2 つの既約表現 $\mathcal{P}_\alpha(V)$ と $\overline{\mathcal{P}_\alpha(V)}$ のテンソル積 $\mathcal{P}_\alpha(V) \otimes \overline{\mathcal{P}_\alpha(V)}$ と密接に関連する. ただし

$$\overline{\mathcal{P}_\alpha(V)} := \{\bar{f} \text{ (複素共役値)} ; f \in \mathcal{P}_\alpha(V)\}$$

であり, これは K の表現としては $\mathcal{P}_\alpha(V)$ の反傾表現を実現している. 記号の準備をする.

$$d\lambda_\alpha(z) := \frac{1}{\pi^n} \kappa_\alpha(z, z)^{-1} e^{-\|z\|^2} dm(z),$$

$$J_\alpha : L^2(V, d\lambda_\alpha) \rightarrow L^2(V) \quad (\text{via density adjustment}).$$

定理 2. $A_\alpha F(z) := F(z, z)$ ($F \in \mathcal{P}_\alpha(V) \otimes \overline{\mathcal{P}_\alpha(V)}$) とおく.

(1) 作用素 A_α は $L^2(V, d\lambda_\alpha)$ への H -同変 ($H = K_{\mathbb{C}}$) な単射で, $\|A_\alpha\| = 1$ かつ $B_\alpha = J_\alpha A_\alpha A_\alpha^* J_\alpha^{-1}$.

(2) $J_\alpha^{-1} f \in (\text{Range } A_\alpha)^\perp$ ならば $B_\alpha f = 0$.

定理 2 (2) から直ちに, 正の自己共役作用素である Berezin 変換 B_α は有限階の作用素であることがわかる. B_α のスペクトル分解の「台」を定理 2 は与える. その固有値について, 次の 2 つの講演で具体例での結果を報告する.